

秀 賞

「ただいま」を心待ちにして

山形県寒河江市立陵南中学校

三年 石 山 颯 大

「十月からお父さん、東京に単身赴任になるから。」
小学校の修学旅行から帰って来た僕に、母はさ
らっと言った。東京？ 単身赴任？ 何だ？ 母の
言葉を理解できないでいる僕に、

「お父さん、東京さ転勤になったんだ。」
と、また母はさらっと言った。単身赴任の意味がわ
からず、

「転勤なら僕も東京さ行くってごじょ。」
「お父さんだけ東京さ行くの。ばあちゃんとお母さ
んとあんたは今まで通り、ここで暮らすの。」

単身赴任の意味がやっとわかった。え？ 父だけ
東京？ 正直、シヨックだった。頭の中が真っ白に
なった。

父はシステムエンジニアである。月に二、三日は
出張で家を空けることはあったが、東京に行つてし
まったらなかなか帰って来られないかな。そんなこ
とを考えていた。あまりのシヨックで、何を考えて
いたのかあまり覚えていない。僕が修学旅行に行つ
ている間、中学入学を控えた僕にとって、大きく環
境を変えるのは良くないのではないかと父と母とが
話し合い、父が単身で東京に行くことを決めたよう
だ。

「僕もお父さんと一緒に東京に行きたい。」
とは言えなかった。

その日から、家の中が何となくせわしなくなつた。
父の住むマンションが決まり、母と僕も一緒に引ッ
越しの手伝いに行った。新幹線に乗り、東京駅で乗
り換え、父が住むことになる蒲田までの電車の中は
人であふれて身動きできないほどだった。満員電車
に揺られて三十分ほどで蒲田に着いた。東京駅ほど
ではなかったが、蒲田駅もすごい人だった。どの
国の言葉なのかわからない外国語があらこちから
ら聞こえてきて、急に僕は怖くなった。寒河江に
いると、外国人と会うことは滅多にないことだが、そ
こは外国人であふれかえていた。ここで父は一人
で暮らしていくのだと思うと、少し心配になった。

部屋は狭く一部屋しかない。お風呂もトイレもす
ごく狭く、またびっくりしてしまった。唯一素晴ら
しいのはベランダから見える景色だった。

引ッ越しも済み、東京からの帰りは僕と母の二人
だけ。東京駅まで見送ってくれた父は、

「月に一回必ず帰っから、長い出張さ行つてたんだ
と思えばいいべ。ばあちゃんとママは頼むな。」

と母がそばに居ない時にこっそりと言った。僕は父
と離れるのが辛く、泣きたくなつたが、父と母を心
配させてしまうだろうなと思い、必死に我慢した。

こうして、祖母と母と三人での暮らしが始まった。
父は仕事で毎日帰りが遅く、僕が寝てから帰宅する
のが普通だった。家に居ると居ないのでは大
違いだ。

家族がそろそろ土日の食卓は、最高の楽しみだった。
学校行事には、いつも父と母が一緒に来てくれた。
スポーツ少年団の活動には、いつも父と僕の二人。
大切な男同士の時間だった。父が家に居なくなつて
初めて、僕にとって父は大きな存在だったと

気づいた。

小学生の頃は土日を利用して、月に一度くらいは
母と、父の所へ遊びに行った。しかし、中学生にな
ると部活動や勉強が忙しくなり、父に会いに行くこ
とはなかなか難しくなつてしまった。すると父は土
日に休まず働き、平日にまとまった休みを取り、帰っ
て来てくれることが多くなつた。

「ただいま。」

玄関から父の声が聞こえる。僕は飛び跳ねるほど嬉
しいが、照れくさいので平常心を保ち、「あつ、お
かえり。」と右手を挙げる。

父が単身赴任をして三年目になるが、今だに父が
居ない家は寂しいし、慣れることはない。それでも、
小学六年だった僕も中学三年になり、体もずいぶん
と大きくなつた。寂しさだけだった三年前とは違い、
仕事や家事で忙しく過ごしている母や祖母の手伝い
を率先してするようになった。父が不在の時に、こ
の家に何かあつてはならない。夜、寝る前の戸締ま
りは僕の役割になった。母の負担にならないように、
できるだけ自分のことは自分でするようにしてい
る。知らず知らずのうちに僕も成長していたのだと
思う。

今日も父は東京の空の下、家族のために頑張つて
働いてくれている。きっと僕が父を心配する以上に、
父も僕や家族のことを心配しているだろう。父と離
れて気づいたことがある。それは、家族への感謝の
気持ちだ。そろって食事ができること、顔を見て話
ができること。小さなことにも感謝の気持ちを持て
るようになった。この気持ちを大切にしたい。僕も今、
目の前にあることに一生懸命であろうと思う。来月
の父の「ただいま」を心待ちにしながら。

作文を書くに当たって

父の単身赴任によって僕に芽生えた、家族への感謝の気持ちを込めてこの作文を書きました。離れていてもいつも家族のことを考え想ってくれている父、厳しいけれど僕のことを一番理解してくれている母、いつも優しい祖母、離れていても家族の心はいつもつながっていることを、書くことを通して改めて感じることができました。